

シンポジウム特集

文明開化の担い手たち—前島密の位置

石井 寛治

1 「文明開化」を唱道した啓蒙家の系譜

私の課題は、前島密（1835-1919）が近代日本の文明においてどのような役割を果たしたのかを位置づけることであるが、これはなかなかの難問である。そもそも近代日本の文明とは何を指すのか、と問われた場合、答えは十人十色であって、とても纏めることは出来ない。そこで、前島が大活躍した明治前半期に盛んに論じられた「文明開化」論の特徴を考えることを手掛かりに話を進めたいと思う⁽¹⁾。

「文明開化」という言葉は、福沢諭吉が幕末に使い始めた言葉で、世界は文明国と未開国および野蛮国に分かれているとされ、福沢は、『文明論之概略』で、「今世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳其、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て未開の国と称し、阿非利加及び澳太利亜等を目して野蛮の国と云ひ」⁽²⁾と述べている。日本は、これから文明国の仲間入りを目指して「文明開化」の道を歩もうとする未開国のひとつという訳である。しかし、福沢によれば、それから20年後の日本は「文明と野蛮の戦い」である日清戦争に勝つことによって、文明国の仲間に入るそうであるから、随分と早い目的達成であった。問題は、日本が辿った「文明開化」の道筋の中身である。

福沢とともに「文明開化」のスローガンを掲げて民衆を啓蒙した人々は、旧薩摩藩士の森有礼の提唱によって1873年（明治六）に「明六社」という学術団体を結成した。森が集めた最初の9人の会員は、表1に示したように、いずれも旧幕臣であり、その多くは諸藩士から幕臣に登用された人々であった（例外は幕臣の子中村正直と、長崎生まれの杉亨二のみ）。

例えば、中津藩士の福沢諭吉は幕府軍艦奉行に従って渡米してから幕府との関係が深まり、やがて幕府直臣となり外国奉行翻訳方として勤務し始めており、大政奉還からは、慶應義塾の経営に専念した。これに対して出石（いずし）藩士の加藤弘之は、江戸で蘭学を学んでいたと

| | 生没年 | 出身 | 幕府との関係 | 明治政府との関係 |
|------|-----------|-------|-------------|---------------|
| 箕作秋坪 | 1825-1886 | 津山藩儒 | 1859蕃書調所 | 1875東京師範学校 |
| 西村茂樹 | 1828-1902 | 佐倉藩士 | 1856老中堀田を助く | 1873文部省出仕 |
| 杉 亨二 | 1828-1917 | 長崎生れ | 1860蕃書調所 | 1870民部省出仕 |
| 西 周 | 1829-1897 | 津和野藩医 | 1857蕃書調所 | 1870兵部省出仕 |
| 津田真道 | 1829-1903 | 津山藩士 | 1857蕃書調所 | 1869刑法官権判事 |
| 中村正直 | 1832-1891 | 幕臣 | 1855昌平坂学問所 | 1872大蔵省翻訳御用掛 |
| 福沢諭吉 | 1834-1901 | 中津藩士 | 1864外国奉行翻訳方 | 出仕を断る |
| 加藤弘之 | 1836-1916 | 出石藩士 | 1860蕃書調所 | 1868政体律令取調御用掛 |
| 箕作麟祥 | 1846-1897 | 津山藩士 | 1861蕃書調所 | 1868開成所御用係 |

表1 明六社の創設時メンバー

1 「文明開化」についての私の理解は、石井寛治「幕臣たちの文明開化」（『郵政博物館 研究紀要』第10号、2019年3月）において論じたので、参照されたい。

2 福沢諭吉『文明論之概略』（原本、1875年、岩波文庫、1931年）24頁。

きに幕府の蕃書調所に入り、間もなく幕臣となったが、その後新政府に出仕している。津和野藩の医家に生まれた西周の場合も、蕃書調所に入り、オランダに留学して人文社会科学を学び、帰国後幕府直参となり、新政府に出仕している。

表示した人々が藩士から幕臣になるきっかけの多くは、蕃書調所のメンバーとなることだった。「蕃書調所」は、江戸幕府がペリー来航後に設立した洋書の翻訳や洋学教育をする機関のことで、しだいに大きくなって幕府伝来の昌平坂の学問所を圧倒する勢いになった。蕃書調所は1863年には「開成所」（開物成務＝人知を開発し、事業を為す）と改称され、これが1877年の東京大学の基になるのである。

蕃書調所には、諸国の藩士で洋学を学んだ人々が次々と集まり、同所の教官のうち、元からの幕臣は、全教官43名のうち8名しか居なかった。大久保利謙氏は、「洋学者もおのずと江戸へ集まっていたが、幕府の政策はこれに拍車をかけて、結局調所には全国から目ぼしい者がほとんど集まった観があった」⁽³⁾と評価している。ただし、諸藩といっても薩長土肥の出身者は、薩摩藩1名（松木弘安＝寺島宗則）、長州藩3名（手塚律蔵、村田蔵六、東条英庵）の計4名だけだということも留意すべきであろう。

② 欧米列強からの「外圧」への対抗思想

蕃書調所の洋学者たちは、欧米からの外圧に対抗するためには、開国路線を採用して政治と経済の近代化を図らなければならないと主張したが、洋学者たちの開国路線は少数派であって、朝廷はもちろん武士や民衆の圧倒的多数は攘夷路線を主張した。福沢諭吉は『福翁自伝』の中で、1862年末に幕府使節の随員としての欧州旅行から帰国して見ると、攘夷論が盛んになって洋学者も何時暗殺されるか分からないという危機的状況だったことを次のように記している⁽⁴⁾。

私どもと同様幕府に雇われている翻訳方の中に〔長州出身の〕手塚律蔵という人があって、その男が長州の〔江戸〕屋敷に行ってなにか外国の話をしたら、屋敷の若者らが斬ってしまうというので、手塚はドンドン駆け出す、若者らは刀を抜いて追かける、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃げきれずに、寒い時だが日比谷外の濠の中に飛び込んでようやく助かったこともある。

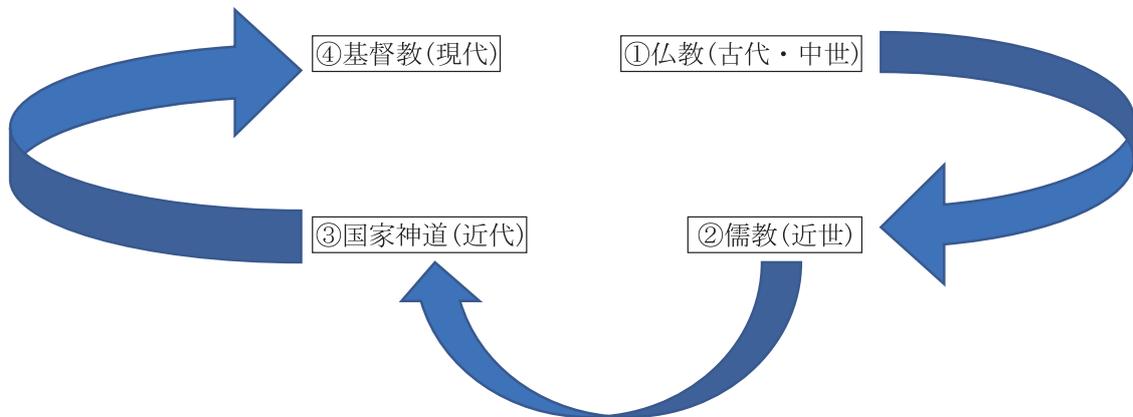
福沢が言うように攘夷論者は矢鱈に刀を振り回す「気違い」に過ぎなかったとすれば、当時の日本国内は「気違い」たちで溢れかえっていたことになろう。しかし、攘夷論者の行動の底には外国人に日本の国土と人民を支配されては困るという**独立の精神**が息付いていたことを見落とすべきではない。それに対して開国論者は、欧米に対抗するためには開国して近代化を図るしかないと考えていたが、当時の日本は独立が侵されつつあり、植民地に転落する可能性があるという**危機感覚**が、福沢を含めてあまりなかった⁽⁵⁾。

3 『大久保利謙歴史著作集』第6巻（吉川弘文館、1988年）15頁。

4 福沢諭吉『福翁自伝』（原本、時事新報社、1899年、角川文庫、1953年）140頁。

5 幕末維新期の洋学者たちは、世界には万国公法（＝国際法）という普遍的基準があることを信頼し、その公理に沿って「外圧」にも対処すべきだと考えたが、その国際法とは欧米の文明国の間でのみ通用し、アジアの未開国に対しては適用されないことについては自覚していなかった。幕末の通商条約では日本の側に外国人への裁判権や関税を自主的に決める権利が認められず、そうした限界がある以上、貿易は開港場の居留地でのみ認めるという日本側の主張を組み込んだ条約が結ばれたが、外国からは国内通商の自由を求める要求が繰り返された。

欧米列強に対する対応を巡って、幕末維新期の日本人は誰もが必死になって考えた。ここでは、文明論の観点から、日本人にとって「外圧」に対抗する際の心の拠り所となった中心的な宗教なり思想が何であったかを考えて見よう。



この図は日本史の諸段階における主要な宗教ないしそれによる思想を古い時代から右回りの①②③④の順に示してある。③国家神道(近代)を例外として、①仏教・②儒教・④基督教という世界宗教が大きな影響を及ぼしているのである。

参考までに、これらの宗教の最近(2016年末現在)の信者数と総人口1億2693万人中の比率を文化庁の宗教団体調査によってみると、神道系8474万人(67%)、仏教系8770万人(69%)、基督教系191万人(2%)、その他791万人(6%)で、信者の総数は1億8227万人と総人口を大きく超えている。重複してカウントされている場合が多いことが分ろう。

このように日本では基督教徒が極めて少ないにもかかわらず、この図で④基督教(現代)という風に、現代日本の思想を代表するものと位置付けたのは、キリスト教そのものというのではなく基督教に思想的源流をもつ「基本的人権」という普遍的価値が日本国憲法の基礎となり現代日本の制度的枠組みとなったことを重視したためである。それは、明六社の啓蒙思想家の紹介する「天賦人権」論の流れを汲むものであったが、近代日本ではそうした普遍的価値はほとんど定着しなかった。その結果は、明治維新以降に日本国民のなかに育った素朴なナショナリズムが普遍的価値に裏づけられた健全なナショナリズムに成長することを妨げ、剥き出しの個別的価値としての国家権力を至高の価値と見なすことになった。内村鑑三が懐いたような、自分は二つのJ(JapanとJesus Christ)のために生きるといった普遍性に根差した愛国心は排除されたのである⁽⁶⁾。

古代から中世に至るまで政治権力と結びついて導入され、次第に民衆にも普及した①仏教は、近世になると、かつての有力な政治的地位を喪失し、世俗権力にすっかり従属するようになった。しかし、民衆の生活を支えて、行動の原動力を与えたという面では、大きな役割を果たし続けたとされている。明治維新に際しては、勤王僧と呼ばれた周防国の僧月性(1817~58)や、大坂出身の僧忍向(月照, 1813~58)が尊王攘夷を説いた末、後者は井伊大老の弾圧にあって薩摩国錦江湾で自殺するなど、僧侶の運動家も現れたが、彼らが仏教信仰に根差す独自性が何であるかは必ずしも明確でなく、1868年の廃仏毀釈令によって日本の仏教寺院は半減し、神社に吸収された寺院も多かった。それにもかかわらず、現在でも仏教信徒数は神道信徒数を上回り、日本最大の宗教としての地位を保っている。仏教の一派には禅宗寺院もあり、前島密は熱

6 柳父園近『日本のプロテスタンティズムの政治思想』(新教出版社、2016年)。

心な禅宗の信奉者であったことは後述する通りである。最大の仏教宗派である浄土真宗は、地方都市や農村でも信徒が多く、その中から農民経営や地方事業家が発展する際の精神的原動力となったことも明らかにされている⁽⁷⁾。

では、江戸幕府の正統的なイデオロギーとなった②**儒教（近世）**は、「外圧」にどう対応したのであろうか。幕府の昌平坂学問所の儒学者たちは保守的で、新たな事態への対応能力は十分でなく、儒者として独自の対応策を提起したのは、肥後藩の儒者**横井小楠**（1809-1869）であった。小楠は、1853年に開国を迫って来たアメリカのペリーにどう対処すべきかについて、「有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶するの二ツ也」と普遍的基準に立って対応しようと提言し、アメリカの無礼・無道な態度は認めるべきではないと論じたが、間もなく、西洋諸国の実情は「有道」らしいと認識を改めて開国論に転じ、改革すべきはむしろ「無道」な日本ではないかと政治改革を主張するようになった。しかし、あまりに理想主義的な儒学思想に立つ改革を主張したため、明治政府でも孤立した挙句、1869年に暗殺されてしまう⁽⁸⁾。儒教倫理は、幕末には、武士クラスだけでなく豪農クラスにも必須の教養として学習されており、最近の歴史学では、藩校や私塾での儒学のテキストに関する議論を通じて新たな政治秩序に向けての「**公論**」といわれる共通意見を生み出していったことが注目されている⁽⁹⁾。明治期以降においては、例えば**渋沢栄一**（1840-1931）を介して、とくに経済界において改めて広がることになる（後述）。

先の図表では、近代日本における支配的な宗教として③**国家神道**を挙げた。周知のように近代日本政府は、国家神道は宗教ではないという建前で、全国民に神社礼拝を強制した⁽¹⁰⁾。神道は特定の教義をもつ**教義宗教**ではなく、神体を礼拝する**儀式宗教**であるが、まぎれもない一種の宗教であり、近代日本の国家神道は天皇制の起源神話を通じて天皇の先祖を神として崇め、忠誠を誓うことを国民に求めた。とくに教育勅語は、義務教育を通じて国民の精神に深く埋め込まれて行った。しかしながら、教育勅語には国民にどのような内容の奉公を求めるかは具体的には書いてない。その時々**の国家の方針に従うことが天皇の名において国民に要求される**のである。日本陸軍では、とくに満州事変が始まると、「上官の命令は天皇陛下の命令である」⁽¹¹⁾として、兵士に絶対服従を強制するようになった。政府と軍部は、**天皇の名を白紙委任状のように使う**ことで、あらゆることを国民に要求し、その要求は、対外的には天皇の権威を諸外国に押し付ける「八紘一字」の超国家主義へと転化していった。

③「文明開化」の精神と外形

明六社の**福沢諭吉**は、「文明開化」について、「或人は唯**文明の外形**のみを論じて、**文明の精神**をば捨てて問はざるもの如し。蓋し其精神とは何ぞや。人民の気風即是なり」と文明化を推進する「精神」こそが重要だと述べた。その「精神」の中心は、『学問のすすめ』冒頭の一句が「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と述べたような精神だと言ってよいであろう。すなわち、人は生まれながらに平等で、自由に活動するように作られていることが重要だと言うのである。同じ明六社メンバーの**加藤弘之**もまた、『国体新論』（1874年）の中で、「自

7 有元正雄『真宗の宗教社会史』（吉川弘文館、1995年）、中西聡・井奥成彦編『近代日本の地方事業家』（日本経済評論社、2015年）、石井寛治『資本主義日本の地域構造』（東京大学出版会、2018年）。

8 松浦玲『横井小楠』（朝日新聞社、1976年）。

9 塩路浩之編『公論と交際の東アジア近代』（東京大学出版会、2016年）。

10 島蘭進『国家神道と日本人』（岩波新書、2010年）。

11 吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』（中公新書、2017年）166頁。

由権ハ天賦ニシテ安寧幸福ヲ求ムルノ最要具」であると説明している。

こうした天賦人權論(=基本的人権論)の考えは、ベストセラーになった彼らの書物や雑誌を通じて全国に広まるとともに、講演会を介して人びとに普及した。熱心な聴講者の中には、やがて自由民権運動の理論的リーダーになる若き植木枝盛(1857-1892)達の姿もあった。ところが、明治政府は、民権派の勢いが高まるのを恐れて、1875年には罰則付きの讒謗律と新聞紙条例を公布して、政府批判の言論を厳しく取り締まるようになった。

そうすると、明六社のメンバーは途端に腰が砕けてしまい、加藤弘之のごときは、自分が唱えた天賦人權論は根拠がないとして撤回した上、それに代わる最新学説としてダーウィンの進化論を人間社会に適用した社会ダーウィニズム(社会進化論)を提唱する。この説は、弱肉強食の生存競争が生物を進化させたように、人間社会も国家間の生存競争によって進歩するという議論で、帝国主義を正当化するイデオロギーとして世界中に広まった。加藤は東京大学の総長や帝国学士院の院長を長く務めて社会進化論を唱えたため、天賦人權論はその後の日本社会の表面からは姿を消すことになった。加藤は、1900年の小学校令改訂に際して、修身の徳目からキリスト教的な「良心」と儒教的な「人道」を削除することを主導し、国民全体に弱肉強食の生存競争を良しとする考え方を浸透させて行った⁽¹²⁾。思想史家田中浩が指摘するように、「明治維新から大正年代末までの日本の西欧政治・社会思想の受容状況は、極言すれば、社会進化論の圧倒的影響下にあった」⁽¹³⁾のである。

そうした状況変化の下で、福沢諭吉は慶應義塾と時事新報社を経営しながら、自分のリベラルな立場を貫こうとしたが、次第に国策の変化に対応して国権主義的な主張に変化してゆき、明六社の頃の主張から遠ざかって行った。その意味で文明開化の精神は、それを唱えた啓蒙主義者の変容とともにほとんど消滅したと言わねばならないであろう⁽¹⁴⁾。

他方で、文明開化の「外形」は、経済面を中心に予想以上のスピードで実現し、アジア最初の産業革命を達成する。そして、ここでも旧幕臣が大きな役割を果たすことになった。1877年当時の中央官庁の官僚のうち薩長土肥の藩閥出身と幕臣出身の比率を見ると、上級官吏(大臣・大輔・少輔ら勅命による勅任官と下からの推薦によって勅任される奏任官)461人については、藩閥が186人(40.3%)と、幕臣の133名(28.9%)を大きく引離しているのに対して、下級官吏(各官庁の長が任免する判任官)4,754人については、藩閥の883人(18.6%)を、幕臣の1,617人(34.0%)が圧倒している⁽¹⁵⁾。政治指導権は薩長などの藩閥が握っているのに対して、実務官僚クラスは旧幕臣が中心となってがちり押さえているのである。

その実務官僚の代表の一人が、政府官僚として通信・交通を中心とするインフラストラクチャー作りに抜群の指導力を発揮し、「郵便の父」と呼ばれた前島密であり、もう一人が政府官僚から民間に戻って近代産業の創出に全力をあげて「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄

12 宮地正人『国民国家と天皇制』(有志舎、2012年)。

13 田中浩『近代政治思想史』(講談社学術文庫、1995年)98頁。

14 もっとも、晩年の福沢は、1899年に出版された『福翁自伝』の末尾に「私の生涯の中にでかしてみたいと思うところは、全国男女の気品をしだいに高尚に導いて真実文明の名に恥ずかしくないようにすることと、仏法にても耶蘇教にてもいづれにてもよろしい、これを引立てて多数の民心をやわらげるようにすることと、大いに金を投じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにすることと、およそこの三か条です」(角川文庫、315頁)と、遺言めいたことを記しているの、世界宗教に見られる普遍的価値への執着は最後まで一貫していたように思われる。福沢が1900年2月に発表した「修身要領」において当時の国家主義教育が儒教風の「自尊自大」の風潮を蔓延させるのを批判したことは、そのことを良く示しているが(宮地正人前掲書186-215頁)、そこで福沢が掲げた「独立自尊」の教えの中には、かつての「一身独立して一国独立す」(『学問のすすめ』三編)と論じた政治世界への関係についての言及は影を潜めていた点に大きな限界があった。

15 石塚裕道『日本資本主義成立史研究』(吉川弘文館、1973年)。

一であった。1919年に亡くなった前島に対する「追懐録」で、大隈重信は次のように前島と渋沢を「両英傑」として高く評価した⁽¹⁶⁾。

明治二年に大蔵書記官であった郷純造〔農民出身の旧幕臣〕と云ふ人、……、此人が前島密君と渋沢栄一君、此**両英傑**を明治政府に抜擢することを建議した。夫れが採用されて両君共政府の役人となった。……前島君も渋沢君も大なる議論家で盛んに議論をする。

以下、前島について論じるが、必要に応じて渋沢との対比を行うことにしたい。

④ 優れた実務官僚としての前島密

文明開化を推進する上で、前島が果たした主要な役割は、私見によれば、いわばその「外形」面の構築であり、「精神」面で直接の貢献をした部分は乏しかったように思われる。もちろん、郵便・電話や新聞、あるいは海運・鉄道という経済社会のインフラストラクチャー作りが、近代的な国民経済を作りあげ、人々の精神面での多面的な交流を密接にしたことによって、近代精神の発達に貢献したとすることができるが、それは結果であって、前島自身が近代精神のあり方を直接人々に教える局面はあまり多くなかったように思われる。もっとも、1881年の政変で下野した大隈と共に、前島が立憲改進黨の創設に参加し、東京専門学校（後の早稲田大学）の創立にも尽力した際に、政治家・教育者としてどのような思想を抱いて活躍したかは、ほとんど明らかにされていないため、このような私見は、前島という人物の評価を限定し過ぎている可能性もある。その点に対する問題提起は、井上卓朗報告に譲ることとし、ここでは主として前島の「実務官僚」としての活動について考えることにしたい。

前島のそうした活動について一つ参考になるのは、前島の八十歳を記念する銅像が1916年に作られた時の建造資金の寄付額合計1万1,155円の内訳である。

ここで目立つのは、三菱財閥と浅野財閥の関係者が多額の寄付をしていることで、合計すると8,200円と寄付合計額の74%に達している。三菱財閥と浅野財閥が海運業を軸に発展する過程で、前島が大きな推進力となったことが反映されているのであろう。

大隈は、「渋沢君は其内政府を退いたが、前島君はズット残って大久保利通の下に内務に居った。而して**通信事業**の為に力を尽したが、特に君が骨を折ったのは**船の事業**である。之れは君は非常に苦しんだが遂に大成功した」⁽¹⁷⁾と述べている。「苦しんだ」のは日本国郵便蒸気船会社の経営難であり、「大成功した」のは、岩崎弥太郎の三菱会社への海運助成策を指している。

日本国郵便蒸気船会社は、前島の提案によって諸藩の所有船舶を集めて創設され、貢米の輸

| | | |
|--------|----------|--------------------------------|
| 3,000円 | 岩崎男爵家 | 日本郵船株式会社 |
| 500円 | 東洋汽船株式会社 | 男爵近藤廉平 浅野総一郎 |
| 300円 | 侯爵大隈重信 | 莊田平五郎 加藤正義 日清生命保険 増田義一 |
| 200円 | 塚原周造 | 中野武営 牟田口元学 若尾幾造 大橋新太郎 緒明圭三 原六郎 |
| 200円未満 | 80人 | |

出典)『鴻爪痕』217-218頁。

表2 銅像建設資金の寄付者（合計97人）

16 『鴻爪痕 前島密伝』（財団法人前島会、1920年、改訂再版、1955年）601頁。

17 前掲『鴻爪痕』605頁。

送独占や船舶修理用の横浜製鉄所の貸与などの保護が与えられたが、経営は不振を極め、3年で解散を余儀なくされた。この間の監督責任者としての苦勞から、前島は、経営能力の備わった三菱を保護するしかないと判断したものと思われる。それが過保護との非難を生み、1881年の政変で大隈とともに下野する一因となったのであろう⁽¹⁸⁾。

このように、前島の主たる貢献は、郵便・電話などの国家的インフラ整備にあり、政府官僚としての立場から三菱財閥や浅野財閥の発展に尽力したと言えよう。その点では、下野した渋沢が、銀行制度と株式制度をフルに活用して、紡績業を初めとする民間企業の発展に努めたのとは方向が異なっていた⁽¹⁹⁾。岩崎弥太郎が1878年に渋沢に海運事業の共同化を持ち掛けた際に、渋沢は「合本主義」を徹底して富の独占を排すべきだとして誘いを拒否したというエピソードが伝えられているが、渋沢の考えは、財閥独占を形成してでも大資本を育てて対外自立を図ろうとする岩崎や前島の考えとは大きく隔たっていたのである⁽²⁰⁾。

渋沢栄一が1873年に下野して第一国立銀行の経営に携わるようになった際に考えたのは、そのための「志をいかに持つべき」かということであり、そこで思いついたのが、前に習ったことのある『論語』だったと言われている。もっとも、渋沢が「物質文明が進んだ結果は、精神の進歩を害した」と反省して、改めて論語の勉強を再開するのは、1909年に古稀を迎えて多くの企業役職を辞してからであるから、それまでの忙しい活動期にどこまで儒教精神に基づく事業経営を営んだかは必ずしも明確ではない。しかし、渋沢は、近代日本社会の豊かさの中での精神的貧困に問題を感じ、「現代の青年がいまもっとも切実に必要としているのは人格を磨くことだ」と述べており、東京高等商業学校などで折に触れて後進の指導に当たっていた。人格を磨く方法について、渋沢は「仏教に信仰を求めものもいいだろうし、キリスト教から信念を汲みだすのも一つの方法だろう。この点わたしは、青年時代から儒教に志してきた⁽²¹⁾と、特定の方法のみを推奨してはいないが、挙げられているのが世界宗教であり世界的に通用する普遍的価値であることは注目すべきであろう。その点では、当時流行の社会進化論に立つ政府が、小学校の修身徳目から「良心」や「人道」を削除したのとは真っ向から対立していたのである。

前島密の場合はもともと洋学者としての教養を身につけてきているが、それは仕事のやり方における徹底した経験的・合理的態度として現れている。前島が若い頃日本中の港湾を実地に調べてみたことや、郵便物の運送費用について実際に計算してみたことなどを想起すると、自ら経験した事実を重んじ、それを基礎に政策を組み立てるという前島の経験を重視する合理的態度は、優れた政策立案者としての注目すべき資質であったと言えよう。大久保利通による前島への評価として、「随分尤らしき議論家もあるが、結局算数に至ると当れるものが少ない、そこに至ると、前島に於ては、総ての議論が算数に基いて居るから他に一頭地を抜くのである⁽²²⁾」という言葉が伝えられているが、「算数」に基く「議論」というのは、根拠のない希望的観測でなく実際の経験的データを踏まえた企画の立案を指していたのであろう。

大隈重信は、「前島君の地位を得たのは唯才幹と云ふばかりではない。また種々の事務が出

18 三菱の海運「独占」への批判については、小風秀雅『帝国主義下の日本海運』（山川出版社、1995年）175-179頁参照。政府の海運政策が1881年の政変を契機に変化したことについては、粕谷誠「海運保護政策と三菱」（『三菱史料館論集』第3号、2002年）を見よ。

19 渋沢は、前島と「相共に反目したと云ふことは無論ない」（前掲『鴻爪痕』625頁）と回顧したが、実は1890年に日本の電話事業を官設にするか民設にするかで対立した際、渋沢は民設方式を強く主張したにもかかわらず、官設方式にこだわる通信次官の前島によって押し切られていた。

20 武田晴人『岩崎弥太郎』（ミネルヴァ書房、2011年）208頁。

21 渋沢栄一、守屋淳訳『現代語訳 論語と算盤』（ちくま新書、2010年）145頁。

22 前掲『鴻爪痕』680頁。

来る事務屋と云ふばかりではない。矢張り政治的技倆、夫れに伴ふ誠実なる人格を有って居た」⁽²³⁾とも評している。ここには、立憲改進黨の運営や東京専門学校（早稲田大学）の経営において大隈の片腕として働いた時期を含めた前島に対する評価が示されていると見てよいであろう。大隈が賞賛する「誠実なる人格」を支えたものとしては、前島が、禅宗に興味をもち、書齋の万卷の経典を繙く真面目な仏教徒としての日常があったことが注目される。その点の証言を以下二つ引用しておこう⁽²⁴⁾。

「翁はどう云ふ動機からか早くから禅学に興味をもたれ、時に座禅を試み、好んで仏書を読まれた。翁の書齋には累々として大蔵経〔仏教聖典の総集版〕が架上に満ちてゐた。…翁は其内から抽取っては翻読されたものである」（市島謙吉）

「禅学を素人がやるのは余程感情の強い人に多い様です。前島もそれと同様な訳で、非常に多感で、癩癩持で感情の強い人であった。それで自分の短所を補ふ為にやったものと思ふ。原担山と云ふ禅学の大家について随分研究したさうですが、講釈禅になって終って、大悟徹底したとはいへない」（高田早苗博士）

後者の高田法学博士（1860-1938、早稲田大学初代学長）の談話は、前島翁が何故禅宗に興味をもったかについて娘婿の立場から上手く説明しているが、仏教聖典を読み漁っても所詮は素人学問に過ぎず悟りを開くには至らなかったというのは、インテリ特有の思いあがりによる批判の可能性があるだろう。大事なことは、前島が仏教という普遍的価値に傾倒し、生き方の指針とした姿勢であって、難解な教義をどこまで理解したかではないのである。

渋沢における儒教への関心、前島における仏教への関心は、何れも当人の真面目な生き方に指針を与えるものであり、天賦人權論とまで行かなくても普遍的価値に即した生き方の追求として重要な意味を持っていたように思われる⁽²⁵⁾。

5 政治指導者と実務官僚・豪商農のエートスの違い

そこで、最後に触れなければならないのは、明治日本の国家権力をその頂点において牛耳っていた藩閥政府の有力者たちの精神生活が、どのようなものだったのかということである。彼らは概して「文明開化」の「外形」には強い関心を抱いたとはいえ、「精神」とくに世界に通用する普遍的価値にはあまり興味をもたなかったように思われるからである。

もっとも、近代日本の最初の首相クラスとってよい西郷隆盛や大久保利通の場合には、儒教あるいは仏教への関心が強かったようである。二人とも当時の薩摩藩士にふさわしく、儒教の教えをまず主流派の朱子学のかたちで教わり、やがて「知行合一」という自力救済を重んじる陽明学を学ぶようになり、西郷はさらに禅宗を学んで自分の過剰気味な感情を制御しようと

23 前掲『鴻爪痕』609頁。

24 前掲『鴻爪痕』261、360頁。

25 もっとも、彼らの政治的地位の上昇のためには、仕事における有能さと生活の真面目さだけでは十分ではなかった。渋沢は、前島の生涯を回顧しながら、その政治的地位が通信次官止りだったのはその出自のためであり、「もう一步好い位置から出て行ったならば、政治界にもう少し雄飛が出来たであろう」（『鴻爪痕』626頁）と述べている。明治政府を支配していた薩長藩閥の中で閣僚クラスまで出世するためには、薩長藩閥とのもう少し強い関係が必要だったと指摘しているのである。渋沢は、自分は、前島と違い、早くから実業界に下野して活躍したのでそこでのトップの地位に到達できたと思っっているようであるが、実業界自体の地位が政治世界に較べて低すぎることに對する年来の不満については、ここでは触れていない。

努めたという。大久保は、西郷のそうした禅宗への傾倒が隠遁生活を好む欠点を生んだと批判して、自らは禅宗とは距離をおくと述べている⁽²⁶⁾。

西郷が好んだとされる「敬天愛人」という言葉があるが、これは清朝の康熙帝がイエズス会に与えた言葉で、儒教の「天命」とキリスト教の「隣人愛」を示す普遍的価値を接合したものとされてきた。しかし、西郷は「敬天」と「愛人」をキリスト教の「新約聖書」(漢訳)を読んで、理解した上で使ったのではないかと思われる⁽²⁷⁾。

ところが、西南戦争で西郷と大久保が対立して結局両者共倒れになった後、薩長藩閥といっても伊藤博文や山県有朋らの長州閥が主導権を握るようになると、世界宗教に代表される普遍的価値への関心が衰えてゆき、代わって国家神道=天皇制イデオロギーという個別的価値への関心が強まっていく。天皇に対する無条件的な忠誠を求めた軍人勅諭や教育勅語を制定した山県有朋の場合は当然として、文学博士井上哲次郎の次のような回顧によると、伊藤博文もまた世界宗教不要論であった⁽²⁸⁾。

先年英国公使館が大使館になったその披露宴会の席上で私は偶々伊藤〔博文〕公と食卓を共にした。話をしてゐる中に公はかういふ事を云はれた。日本は宗教に依らずして、道徳で立派にやっけて行けると云はれた。公の此考は大に注意すべきことである。私は豫ねて倫理的宗教を主張して、宗教に依らずして徳育でやっけて行ける事と確信してゐたから、ひどく之に感心した。

イギリスが駐日公使館を大使館に格上げしたのは、日露戦争直後の1905年11月であるから、この話はその頃のことで、すでに小学校の修身徳目から「良心」や「人道」といった宗教色のある徳目が加藤弘之らによって廃止されていた。したがって、伊藤の見解は、前掲図の世界宗教①②④でなく国家神道③のみで大丈夫と言っているようなもので、その点では山県と同様の理解だったと言えよう⁽²⁹⁾。

国家神道は特定の教義を持つ宗教ではないから、政治指導者たちの頭が先に述べた社会進化論で一杯になっている場合には、国家神道の中心的内容は社会進化論そのものに近くなったに違いない。総合雑誌『太陽』1900年6月号に載った前首相大隈重信の文章の一部を引用しよう。

26 前掲『鴻爪痕』486頁。

27 西郷がキリスト教の聖書を読み、その教えに共鳴していたことについては、最近しばしば指摘されている。例えば、守部喜雅『西郷隆盛と聖書—「敬天愛人」の真実』(いのちのことば社、2018年)を参照。この問題は、西郷の遺訓と聖書の言葉をきちんと読み比べることによって確実に理解できよう。例えば、聖書で繰り返される「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」(マルコ12・31)という言葉と、山田濟齋編『西郷南洲遺訓』(岩波文庫、1939年)の「我を愛する心を以て、人を愛する也」(13頁)という言葉は、全く同じ内容である。西郷遺訓は、その理由として、「天は人も我も同一に愛し給ふゆえ」(13頁)と述べているが、ここでの「天」は、儒教的な抽象概念でなく、キリスト教の人格神に近い。それだけでなく、この理由付けは、聖書が、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」とする理由として、「天の父は悪い者の上にも良い者の上にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らして下さるからである」(マタイ5・45)と述べているのとそっくりである。キリスト者の内村鑑三は、西郷はこうした言葉を直接天から聞いたと考え、作家の海音寺潮五郎は、西郷は奄美大島への流罪中に「敬天愛人」の哲学に到達したと論じているが、西郷は、漢訳の『聖書』を読んでいて可能性がきわめて高い。

28 長州藩では維新三傑の一人とされる木戸孝允の評価も問題となるが、「開明派官僚の総帥」として「もっとも先見に富んだ政治家」でありながら、「横井小楠の歴史的役割を継ぎえないものであった」点に、木戸だけでなく近代日本の「国家理想の欠如」を問題として指摘する大江志乃夫『木戸孝允』(中公新書、1968年)の評価を掘り下げる必要があろう。大江は、木戸のことを蘭学修業を積んだ「理性人」と評するが、江戸での若き木戸は、長州きっての蘭学者東条英庵や手塚律蔵と接触しつつも、洋式艦船や歩兵訓練の蘭書を自力で読んだ形跡はなく、蘭学者とは言えない。しかし、その過程で西洋の合理主義を学び取った可能性はあろう(木戸公伝記編纂所編『松菊木戸公伝』上・下、明治書院、1927年)。岩倉使節団に参加してからの木戸は、政治全体のリーダーとして精彩を欠くようになるのでここでは扱わない。

十九世紀の終を告げ、二十世紀の新舞台に幕を開かんとするに鑑み、世界人類の**生存競争**は、将来如何に其の勢力を消長すべきを案ずるに、之を過去の事跡に徴するの外なし、……**弱肉強食**は**優勝劣敗**の人間社会に於ける常態にして何れの時にも免かる能はず、此の**生存競争**あるが為に、各人間の智識を進め、列国間の地位をも高くし、延て人類の幸福を増進するも、之が為に野蛮国は漸やく文明国人の為に侵略せられて、世界は少数強国の併する所と為らんとする傾向あり。

「生存競争」、「弱肉強食」、「優勝劣敗」といった社会進化論の用語がふんだんに使われており、世界情勢も帝国主義支配が強化されるとしているが、同時にそのことが「人類の幸福を増進する」のだという社会進化論特有のイデオロギーが宣伝されている。

こうした事例に基づいて考えると、一般民衆のエートスは別として、近代日本の指導者であった国民上層の精神生活は、**最上層の政治指導者層が意外と世俗的**で、「国家神道」という儀式宗教の信奉者であって、**普遍的価値に対する関心が弱く**、社会進化論のイデオロギーに染まった帝国主義的な心性＝エートスをもっていたと言えるであろう⁽³⁰⁾。

それに対し、**中間の実務官僚・豪商農層の一部は仏教・儒教**（あるいは基督教）の信仰が厚く、大蔵経や論語（あるいは聖書）などを愛読していたように思われる。前島と沢尻は、それぞれ実務官僚と豪商農を代表する人物として、世界宗教に見られる**普遍的価値に沿った着実で真面目な生き方を求めていた**と言えるのではなかろうか。もちろん、世界宗教が唱える普遍的価値については、杉浦勢之報告が論ずるように、様々な解釈があるが、問題としたいのは、それぞれの人物が自らの生き方を定める際に**古典古代以来の「普遍的価値」をめぐる問題点**（例えば自分は一体何者なのかという問い）への**関心の有無**であり、そうした緊張感の下で**自己の生き方を反省する姿勢の有無**なのであって、近代日本においてもそうした関心は少なくとも**中間層の一部には脈々と存続していた**ことを、前島の位置付けについての私の報告の結論として強調したい⁽³¹⁾。

（いしい かんじ 東京大学名誉教授）

- 29 春畝公追頌会『伊藤博文傳』下巻（統正社、1940年）901頁。なお、伊藤が若い頃から宗教とりわけキリスト教についての理解が浅かったことについては、岩倉使節団の一員として欧米に滞在中に、条約改正を実現するには天皇以下日本人全体にキリスト教を信じさせキリスト教国化するのが早道だと提言していたこと、木戸がベルリンからロンドンに呼び寄せた青木周蔵が木戸の問いに答えて、西洋での厳しい宗教戦争の歴史を述べつつ、簡単にキリスト教国化するなど絶対に不可能だとして猛反対したため、木戸が伊藤を厳しく叱責したという故事からも明らかであろう（『青木周蔵自伝』東洋文庫、1970年、村松剛『醒めた炎—木戸孝允』中央公論社、1987年）。
- 30 作家の海音寺潮五郎は、明治政府の上層部の欠陥は、「無教養であり、学問がなかった」点だと批判し、評論家の丸谷才一は、「明治政府で一番具合が悪かったのは、倫理がなかったことではなくて、倫理を生み出す母体というべき基盤がなかったということです。これは下級武士たちが東京に来て、すぐに偉くなって威張った結果です。日本には上流階級というものが非常に貧しい形でしか出来なかったですね」と語り、そのため、「近代日本文化は質が低い」と言い切った（『西郷隆盛—維新最大の謎 生誕190年・没後140年記念総特集』KAWADE夢ムック、2017年）。但し、「文化」を作っているのは上流階級だけではない。
- 31 このように、最上層＝個別的価値重視、中間層＝普遍的価値重視という具合に、近代日本の国民指導層のエートス分布が複層的だったとすれば、日本全体が帝国主義化の方向を辿ったのは何故かが問題となる。この問題を解明するためには、大多数を占める国民下層（労働者・中小商工業者・農民）の動向だけでなく、とくに中間層たるブルジョアジーの動向を検討する必要がある。拙著『帝国主義日本の対外戦略』（名古屋大学出版会、2012年）は、満州事変前後における満鉄と在華紡の動向を調べ、関東軍の軍事侵略によって生じた日貨ボイコットで危機に陥った在華紡ブルジョアジーが、事変の拡大に反対しつつもそれを貫けなかった事情を論じたものである。そうした分析の積み重ねが今後必要であろう。郵便史との関連では、全国展開した三等郵便局の担い手である局長の地位とエートスが問題となる。彼らの経済的地位については、地方豪商農とされる実態が地域的・時代的にどのようなものであったかの分析を試みる予定である。